

小学生の学習場面における完全主義と目標志向性との関係

○木村早紀子(広島大学大学院)

藤木大介#(広島大学)

キーワード: 完全主義, 目標志向性

学習場面において学習者がよい結果を求めて学習することは高い動機づけにつながる望ましい姿である。一方でよい結果を求めすぎると、思った結果を得られずやる気を失うこともある。過度に完全性を求めることは完全主義と言われ(桜井・大谷, 1997), 学習者の意欲や行動に影響を与える。完全主義には、高い目標を課すというポジティブな側面(高目標設置)と失敗を過度に気にするというネガティブな側面(失敗過敏)があり、高目標設置は自己充実達成動機および競争の達成動機に正の影響、失敗過敏は自己充実達成動機に負、失敗回避動機に正の影響を及ぼす(胡(増井)・岩永, 2016)。

しかし、先行研究では青年期以降を対象にしたものが多く、小学生を対象にした研究が不十分である。小学校教育では、中庸を理解するのが難しい児童もいることも踏まえ、理想を追求することを是とする指導が行われやすい。また、児童期には、テストや成績など目に見えてわかりやすい評価基準のもとで自己評価したり他者と比較されたりという経験が増える。そのような時、どう完璧にしたいのか、何のために完璧にしたいのかによって学習行動も変わってくるだろう。何のために学習するかに関する目標志向性の研究では、小学4年生から中学1年生にかけて自己の能力の向上を求めるマスタリー目標から他者の評価を気にする遂行目標へ変化する傾向が示されている(Midgley, Anderman, & Hicks, 1995)。この変化の背景には知能観の発達的变化や環境の変化があげられているが(Dweck, 1986; 上淵, 2008), 周りの基準や他者からの評価に影響されやすい児童期における完全主義も関係するのではないだろうか。児童が何のために完璧でありたいかということをも明らかにすることで、完全主義と学習行動との関係も検討できるであろう。そこで本研究では、小学生の学習場面における完全主義と目標志向性との関係性を検討する。

方法

調査対象者 小学生4~6年478名であった。

材料 小学生の学習場面における完全主義の傾向を検討するため、Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990), 桜井・大谷(1997), 桜井(2005)を参考に作成した尺度を使用した。また、目標志向性に関しては、田中・山内(2000)の目標志向

性尺度を使用した。

結果と考察

小学生の学習場面における完全主義について探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った結果、高目標設置と失敗過敏の2因子が抽出された。さらに、目標志向性との関係を検討するため、完全主義を独立変数、目標志向性を従属変数として共分散構造分析を行った(Figure 1)。

高目標設置は、マスタリー目標、遂行接近目標および遂行回避目標に正の影響を示した。マスタリー目標は自己内での評価、遂行目標は他者との比較による評価を行うことから、高目標設置が強い児童は、自分自身の中でも他者から見ても完璧であることを求めていると考えられる。また、胡(増井)・岩永(2016)ではみられなかった回避的な目標への影響もみられた。これは、児童期では完璧に達成できることが失敗のないことと表裏一体であるからだと考えられる。また失敗過敏は、遂行接近目標および遂行回避目標に正の影響を示した。これより、学習場面での失敗過敏が強い児童は、他者からどのように評価されているかを気にし、他者から見て完璧でないことを恐れることが考えられる。

これらのことより、小学生の学習場面における完全主義は、自分的にも他者から見ても完璧であることを求め、完璧でないことを恐れることが示唆された。完璧が自己内での完璧に比重があるうちは意欲的な学習行動につながるが、他者から見た完璧を求めたり完璧でないことを恐れたりしすぎると、自分の能力に対する自信の高低によってやる気が左右されるリスクもある特性であることが考えられる。

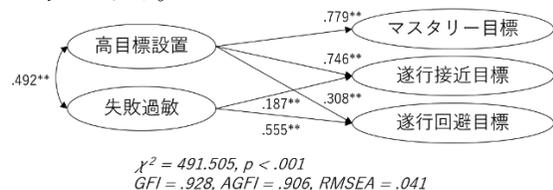


Figure 1 完全主義と目標志向性における共分散構造分析結果

引用文献

胡(増井)綾乃・岩永 誠(2016). 学業場面における不健全完全主義の動機づけに伴って自己価値及び失敗の反すが及ぼす影響 パーソナリティ研究, 24, 190-201.